

ハイデガー・フォーラム (2011年9月18日、龍谷大学深草学舎)

「正義」について——ニーチェとハイデガー

須藤訓任

ハイデガーの「存在史」の構想によれば、西洋の「形而上学」は本来的には、プラトンの善のアイデア、それも「軛 ζύγον」(「考えられるもの」と「考えるもの」とを結び合わせる)としての「善のアイデア」に始まり、ニーチェの「力への意志」、それも「正義」としての「力への意志」に至って完成し完結する。つまり、その本質的諸可能性が汲み尽くされ使い果たされる(そのことによって「別の開始」への「移行」がなされるはずである)。この場合、むしろ形而上学を直接的には指す「それ」とはより具体的・第一義的には、「ホモイオーシス(一致)」としての「真理」のことであり、その真理規定に内蔵された可能性が消費され尽くすことが、形而上学の完成・終末にほかならない。

「第一の開始」の始まりからその完成にまでいたる、「存在史」としての形而上学の進展とは、言ってみれば、ねじの自己締め付け的な回転の進行として、たとえば、自動車のタイヤを取り付けるねじ(ボルト)がタイヤの回転とともにどんどん締め付けが昂進されるといったような形で、イメージできよう。ハイデガーは形而上学の歴史をそのような自己締め付けの増進として構想していたのではないか。その場合、「自己締め付け」とは、事象の根本的諸可能性の——ハイデガーの用語を借用するなら——「投企 Entwurf」による限定(したがって、他の諸可能性の排除)と、その可能性の現実化=消費ということを意味する。それはまた、はじめはまだ臃であった、可能性の正体(形而上学における、「意志への意志」としての「存在」)が——プラトン・アリストテレスから中世哲学を経て、デカルト、ライプニッツ、シェリングといった橋頭堡となる哲学者間を通過して、「最後」にはニーチェに到達するという経路をたどって——徐々にむき出しになってくる過程、遠慮会釈なくその可能性を、そしてその可能性のみを實現し、他の可能性を締め出してゆく過程である。

おおよそこのように、形而上学の歴史の全体的構想——「物語」としての形而上学の筋立て——に見当をつけた場合、どうして他ならぬニーチェ哲学が、その「終末」の完成態であるとの判定が下されるのか、その思想的仕様を、いわば仕掛け・カラクリを突き止めたい。そして他方では、カラクリの洞察を通して、カラクリを解除することによって、ハイデガーの言う意味での「形而上学」的ではないニーチェ哲学の——いまの場合、は、「正義」の——解釈可能性が開拓できるのか、その経緯と正当性を示すよう、試みたい。これが、今回の発表の「意図」である。

後期ニーチェによれば、「正義」とは、生の力の絶えざる上昇を目指してパースペクティブを拡大してゆく「生そのものの最高の具象者（代行者）Repräsentant」として、「建設し、排除し、破壊する思考法」のことである。この「思考法」にハイデガーは、ニーチェにおける「真理の本質」、すなわち「真理」の「可能性の根拠」を見定めようとする。「生の最高の具象者（代行者）」としての「正義」によって、ニーチェが真理のあり方として剔抉しようとした二種類の形態がそれぞれ可能にされるとともに、その両者が等しく「真理」として一括りにされて「本質」を共有することが根拠づけられるというのである。二種類の真理の形態とは一方で、認識（科学）の真理としてのBestandsicherungであり、他方では、芸術の造形する真理としての「仮象の輝き」である。前者は生を安全に確保し維持するための真理であり、後者は生がみずからを越えて上昇していくための真理である。こうした二種類の真理は結局、古代ギリシャ、正確にはプラトン以来のホモイオーシスとしての真理を前提とし、そこから抜け出すことができている。むしろ逆に、そのホモイオーシスの完成態とでもいふべきものである。なぜなら、真理とは生（「力への意志」）との「一致（等化＝ホモイオーシス）」であると、ニーチェはその根底において前提しているからである。これら両方の「真理」が生力の力の上昇と維持のためには不可欠となる。生の力の上昇と維持に適っていることが「正義」である。「正義」に則った真理であってこそ、「真理」はその名に値する。そのかぎり、「真理」を（生の力を上昇させ維持する）「真理」たらしめる「正義」は「生の最高の具象者（代行者）」である。

二種類の「真理」はいずれも「仮象 Schein」（「見かけ Anschein」と「輝き Aufschein」）である。しかし、真理が仮象とされるためには、「仮象」ならざる「真理」が暗々裏に仮定されているのでなければならない。それは「一致（ホモイオーシス）Übereinstimmung」ないし「（一致の）正しさ Richtigkeit」としての、つまり Aduaequatio という伝統的規定に則った真理である。これこそ、プラトンが史上初めて切り開いた形而上学的な真理規定である。（ハイデガーによれば）プラトンによって「Unverborgenheit（アレーテイア＝非覆蔵性）」から「ホモイオーシスのオルトテース（一致の正しさ）」へと「真理」は変換され、以降後者が基本的に「真理」として通用することになった。面白いことに、ニーチェにおいて、真理が二種類とも「仮象」として規定されるのは、両者の「真理」が事態そのものと「一致」していないからである。認識の真理は、本来絶えざる生々流転を繰り返す「生成」の事態からするならば、恒常的「存在」をもって真理となすBestandsicherungである以上、「仮象」、もっとはっきり言うならば、「誤謬」でしかありえないし、その点は、芸術もまた、その創造する「作品」も必然的に多かれ少なかれ恒常的なものであらざるを得ない以上、同断であるばかりか、芸術はごく常識的な意味

からしても、現存しないものを製作するのだから「仮象」である。したがって、「誤謬」としての二種類の真理の根底に存しているのは、「一致」としての真理観であり、それが「不一致」としての真理を裏側から支えている。ニーチェは、まさにプラトニズムの「逆転」をこと挙げするが故に、その真理規定は表面上いかに反プラトニズム的であろうと、実は（命題と事態との「一致」という）プラトニズムの真理規定を前提せざるを得ないし、そのかぎり、プラトニズムに巻き込まれ囚われたままとなっている。

以上のことからして、ニーチェの（「力への意志」としての）「正義」がプラトンで言えば「軛」としての「善のイデア」に相当すると理解される。二種類の真理は（事実との）「不一致」という意味での「誤謬」ないし「仮象」として規定されるからこそ、一括りにされるのであり、「真理」とは「不真理」であるというその一点で、両者は「軛」にかけられる。この「軛」こそ「真理」の「可能性の根拠」としての「正義」である。「軛」としての「善のイデア」によって本格的に開始された形而上学はニーチェの（「軛」としての）「正義」によってその完成態に到達し、大団円を迎える。形而上学の「開始」と「終末」には「軛」がある。形而上学は求心的に締め付ける「軛」によって開始され、「軛」によって終了するのである。それはまさに、「締め付け」によって開始され「締め付け」によって終結し完成するというにほかならない。そして、「軛」とは究極的には、「存在」と「真理」とを相互に「締め付け」「一致」させるという、両者の「ホモイオーシス」にほかならない。

「正義」とは「生そのものの最高の Repräsentant」であった。先には Repräsentant は「具象者（代行者）」とされたが、それは細谷他訳の「具象者」への敬意のゆえである。とはいえ、「具象者」と「代行者」では微妙に違う。発表者としては、もっとはっきり「代理者」と訳したいところである。そうすると、違いはより際立ってくるだろう。「具象者」とは「代理者」というよりは、「表現するもの」さらには「表象するもの」の意味に近い。ハイデガーは一貫して、repräsentieren, Repräsentation を「表象（する）」の意味で理解する。換言するなら、ハイデガーはニーチェの哲学を形而上学の完成として位置づけるためには、Repräsentant を「具象者」、より明確には「表象するもの」の意味に理解しなければならなかった。そうであってこそ、二種類の真理を一括りに統括する、その可能性の根拠としての「正義」もまたハイデガー的な意味で了解可能となる。それはすなわち一切の事象を表象として、人間という「力への意志」がみずからの力の上昇・拡大（と維持）を目指して、そのための Bestand（用材）という形で利用し、そのようにして、人間による「地球の支配」を確立する、という思想にほかならない。一切を表象として「确实」に確保し、また確保したことの「確信」であり、それ以外の趨勢はことごとく締め出してゆく、ますますきつくなる「締め付け」の根本動勢

の正体暴露・披露——それが形而上学という「存在の歴史」だというのであろう。

しかし、これが、これだけが、ニーチェ解釈の唯一的可能性、少なくとも最も有力な可能性なのであろうか。Repräsentation を Vorstellung (表象) の意味で解釈するのは、「存在史」の構想からするならおそらく、十分に正当化されるかもしれない。しかし、そのみが解釈の枠組みであらうか。ごく常識的に考えても、先にも示唆したように、Repräsentation を「代理」として理解することも、それなりに可能である。しかし、どのような解釈の枠組みを採用するなら、「代理」なる解釈が有力となるのであろうか。それは、ニーチェ自身の時間枠をより大きくとり、初期や中期の「正義」思想をも取り込んでうえで、Repräsentant としての「正義」を解釈することである。当たり前のように思われるかも知れないが、こと「正義」に関しては、ニーチェの思想的生涯全体を射程に収めそのうちに位置づけ直すことによって、Repräsentation は「表象」ではなく「代理」として理解することの正当性が、論証される。(ハイデガーでは、意図的に後期ニーチェに限定される。) まず初期思想における「正義」について検討しよう。

「生に対する歴史の利と害」(第六節)でニーチェは、「正義」について次のように言う。「というのも、それ〔正義〕のうちには類い稀な最高のもろもろの徳が一つになって隠されているからである。それはまるで、あらゆる方面からの流れを受け入れ自分のうちに呑み込む底知れない海のようなのである。」これは、テオグニスの詩句を念頭においたものであるが、いずれにせよ、「正義」は、徳の中でも際立って卓越したあらゆる徳が合流し着流する「海」である。ニーチェは一方で、「生」の「不正義」ないし「不公正」を強調する。生きていく上で、生命体は数々の不正義を犯さざるをえない。そのことは、食物連鎖一つをとっても明らかである。みずからの咎なくして、日々莫大な量の生命体が他の生命体の栄養摂取などのために命を失う。しかし、この「不正義」を正そうと、生命の掠奪を停止するとしても、それが必ずしも「正義」にかなうとは限らない。いうまでもなく、それによっては逆に生命を失うものも出てくるからである。

最高の諸徳の合一というかぎり、「正義」はきわめて多面的なものであろう。なぜなら、ニーチェの考えでは、「正義」においてはそうした徳がすべて合一化されているが、しかし同時に、「底知れぬ海」に呑み込まれたかのように、諸徳は、少なくともその一部ないし大部分はそれとして「隠されている」というのだからである。つまり、「正義」とは、時に応じて、必要な徳をして顕在化させてその責務を果たさせると同時に、裏面では、その時には必須とはならない徳に対しては背後に控えさせ姿を「隠させる」という意味で、諸徳の調和のとれた統率と機敏な出動態勢を意味するのである。したがって、それぞれの場合に、特にどの徳が出動し、逆にどの徳が背後に退くべきなのかが見極められなければならない。問題はむしろ、こうした正義を実現しうる「力」——「優越し

た力」とか「公正であることができ」「裁くことが許される」「力」——とはどのようなものであるか、である。単に「正義」への意志をもつだけではかえって逆の結果を呼び出しかねない。「最も恐ろしい苦しみはまさに、判断力を持たない正義への衝動から、人間にやってきた。」

「正義」とは、すべからず偏向のない、あらゆる関連する事情や立場などを勘案に入れる、その意味で中立な「客観的」認識の立場と、そうした認識の十全な実践として理解されやすい。そうである限り、自分自身にとって不都合なことに目をつぶることは許されず、「多量のまがい物・未熟なもの・非人間的なもの・不合理なもの・暴力的なものが白日の下に出て」こざるをえない。だから、中立的な認識「衝動の背後に何ら建設衝動が働いて」おらず、「唯一〔純粹中立な〕正義のみが支配する」場合には、生の力は逆に削がれてしまう。「未来を建設する者のみが、過去を裁く権利を持つ」のであって、そういう建設性・創造性抜きには、(過去の裁きという)「正義」は遂行されえない。一見中立で客観的認識が果たされたようでありながら、そこには生から剥離した認識の自己欺瞞的満足が存するだけである。その意味で、「不正義」の閉じられた地平こそが、人間に「健康」をもたらすとともに、「単に不公正な *ungerecht* 行いばかりでなく、むしろあらゆる正しい *recht* 行いの母胎」(S. 249)となる。なぜなら、中立的「公正」ないし「正義」の立場からするなら、「不公正」と判定される行為も、生の立場からは、まさに生きることを可能ならしめるがゆえに「正しい」と判断されてしかるべきだからである。まさに「生きることと不公正であることとは一つである。」だからこそ、不公正な生の判決と厳密な正義の判決とは、まさに不公正にして公正であるという点で、一致してしまう。それほど、「生」と「正義」の関係は捩じれ、相互に対立するものでありながら、相互反転するほど、見通しの効かないものである。結局「生に対する歴史の利と害」の段階では、「正義」の問題に決着に至る道筋を付けることはできなかった。

若き二十歳代のニーチェにとって、「正義」の実現(遂行)困難ないし不可能性とはなにより、あらゆる生現象の偏向に根差していた。それぞれの生命体はその生命を全うしようとするが故に、その存在も思考も自分の都合に有利なように歪まざるを得ず、したがって、他の生命体に対して「公正さ」を貫徹することが原理的に不可能とならざるをえない。それは要するに、他の生命体の立場になることの不可能性であり、つまりは他の生命体の代理となることの不可能性である。厳密に言うなら、他の生命体自身も、(自己と等しく)何らかの意味で偏向しているのだから、他の個々の生命体の代理となることが、万が一可能だとしても、それ自体で即座に「正義」の内実を構成するわけではない。「正義」とは「代理」の問題であり、「代理」が一体何の、どのような代理なのかという、問題である。若きニーチェは問題のこの核心を照射するだけの、思索の強力

な光源を見出すにいたっていなかった。「代理」の不可能性に問題の核心が存していた。「正義」は、後期になると、「生そのものの最高の代理者」として特定され、逆に、ある程度の見通しがある問題に与えられるようになる。

代理としての正義は不可能である。しかるに、この不可能性を盾に取って、代理を徹底的に回避することは、なんらかの代理以上に不正義である、つまり、「客観性」の「純粹中立な正義」に走ると、生の立場を掘り崩すという最大の不正義を侵す犯すことになる——ニーチェ中期の「正義」をめぐる問題意識の出発点とはこのようなものである。こうした挟み撃ち状況のなか、取るべき方策はどのようなものとなるのか。それは、「正義」の原理的な人為性の承認に存している。力の「均衡の原理」(『漂泊者とその影』22)としての「正義」がそれに相当する。力の均衡、すなわち等しさにおいて「正義」は成立する。しかし、力の等しさというこの前提はどのように考えたらよいのか。厳密に考えるなら、二つないしそれ以上の力の等価性など、ほとんど成り立ちようがない。そのかぎり、前提の成立不可能性に連動して、「正義」それ自身もまた成立困難なものということになる。正義が不可能だとしたら、どういうことになるのか。それこそむき出しの暴力によって、暴力同士の闘争によって、一切は決済されることになるのか。しかし、暴力はさらなる暴力を招来することになりかねまい。すなわち、なにごととも決済されず解決されない。それゆえ、力の均衡＝等価性は、「それ自体」としては成立不可能だとしたら、人為的に設定されるしかない。「正義」の必然的人為性がそこに根差す。

力の等価関係の設定とは、こうして、等価関係それ自体の成立不可能性に裏付けられている。それはある意味で、スポーツなどでいう「ハンディ」に近いだろう。ハンディの設定で、競技能力の平等性が確保されるわけではないが、確保されたというポーズをとること、当事者が相互にその確保を承認するポーズが可能となる。言ってみれば恣意的で「暴力」的な均衡の設定——このことによって、当事者通しも納得がゆくないし納得すべきだと決めつけられるとともに、通常の意味での、法的・道徳的な意味での「正義」も可能となる。

しかし、そもそもどうして力の均衡において「正義」が成立可能となるというのだろうか。当事者の一方が他方に対し力関係において圧倒的優位に立つなら、ことはすべからず一方の思うがままに決済されてしまい、そこには「正義」など出る幕もないということになるだろう。そうではなくて、ほぼ両者の力が等しく均衡するという条件下にあるならば、一方が他方に決定的に優位に立ったり、その優位ゆえに勝利するということもありえないだろう。そうした状況下、両者の間に対立関係が現実化した場合、一方的な勝利の不可能性のゆえに、対立関係は長期化して消耗戦となり、最後には当事者の双方ともが滅亡ないし根絶される可能性が高まるだろう。そのとき、両者はことが行き着

く先に行き着く前に、手を打つ必要性が出てくる。「正義」なる概念が登場するのはその時だ、とニーチェは示唆する。この手打ちこそ、古来正義の定義として名高い *suum cuique* であろう。

対他関係という前提を顧慮するかぎり、「正義」は「力の均衡」として、つまりは、等価的な力関係の設定としてはじめて、成り立つ。力の等価性の人為的設定なしには「正義」はありえない。そして、力の等価性の設定とは、「代理」の可能性の設立そのものにほかならない。「代理」は原理的には不可能なるゆえに、人為的に可能化されねばならないのである。不可能なるがゆえの可能性——そうであるがゆえに、「代理」は、そして「代理」としての「正義」は必然的に完全無欠の完成態となることはありえず、それゆえに原理上撤回可能、再開可能なものとならざるをえない。ねじの締め付けの自己増進どころか、ねじは必然的に締め切れない、ゆるみ・たるみが必然的につきまとわざるを得ないものである。多種多様なパースペクティブの百花繚乱としての生、その生の最大多数のパースペクティブの代理と統合としての「正義」——そこには、生とのホモイオーシスの自己増進的な締め付けなどありえないのであって、逆に一つの解釈（としての「真理」）の登場は、同時に原理的に、他の諸解釈の可能性の胚胎となるのであって、それこそ「自由」の「遊び *Spielraum*」の温床となるのである。したがって、最大多数のパースペクティブの統合としての正義も、生へのホモイオーシスではなく、生の遂行の最高の形態の一つ——あくまでも、一つ——である。そもそも、そこでは、生であれ、何であれ、何ものかとのホモイオーシスが、真理の究極的基準となるという発想それ自体が意味をなさない。

それに対し、不真理としての真理をも取り込んだ、生とのホモイオーシスとしての正義とは、生の最高の「表象者」として、ホモイオーシスのいわば極北・極限であって、それ以上のホモイオーシスはもはやあり得ない、そういう、ホモイオーシスの自己締め付けの極点到達である。ハイデガーは「正義」を「真理の本質」として、そのときどきの真理の根源として、理解する。そのため「正義」は結局「力への意志」と同一視されざるを得なくなったように思われる。そこでは、力の上昇の方向性ないし内実が一義的に明瞭に定まっていると想定されている。だから、「正義」と「力への意志」は厳密に一致し合体し両者は同一視されるというか、両者の間には隙間がない。「力への意志」は時に応じて恣意的に真理の基準を定めるが、しかし、その設定自体が、「カオス」としての生成とのホモイオーシスとなる。そのかぎり、設定の恣意性は力の上昇・維持に直結するはずである。恣意的でありながら、そのつどの基準の設定は本質的に力の上昇・維持との「一致」であること、このことが「正義」なのである。そのとき、力への意志の生態と力の上昇・維持という本質的尺度との間には齟齬やズレが入り込む余地は

ない。すなわち、「力への意志としての正義」であるとともに「正義としての力への意志」であり、実際ハイデガーはこの両方の言い方を採用している(Bd. 47, S. 267, 312)。こうして、「正義」と「力への意志」とはまさに「一致」する。両者は厳密に「同じもの」の両面である。力への意志とは「生」の別名であり、そして生との「一致」こそが「正義」の究極の内実である。ハイデガーの論証が目指していたのは、両者のこの「一致」——ホモイオーシスの極北、上述の、存在と真理の「ホモイオーシス」——である。

ところが、ニーチェ自身には「力への意志としての正義」という語法は見られても、「正義としての力への意志」という言い方は存在しないのである。この片務性によって「正義」と「力への意志」との間につねに、ズレや齟齬の可能性が胚胎されることになる。「正義」とは「力への意志」による一つの「結果」であり、「力への意志」の自己措定としての一尺度、それも「最高」ではあっても、あくまでも（疑似）尺度にすぎないのであり、そこに、「正義」と「力への意志」との偏向関係が宿す。この偏向は「生の代理者 *Repräsentant* としての正義」という観点からはじめて、浮き上がってくる。なぜなら、「正義」は「生の代理」ではあっても「生そのもの」ではなく、しかも「代理」とは厳密には不可能であり、その意味でいつでも近似的で曖昧さ不確定性が纏綿せざるをえないのであって、そのかぎり、同じく「正義」の基準自体は恣意的に設定されるにせよ、しかし、それは設定者である「力への意志」のその都度のあり方と齟齬をきたしたり、対立したりせざるを得ないからである。というのも「正義」の基準は、正確には多数の「力への意志」のネットワークのうちから設定されるのであり、そしてその本質的多数性ネットワークはつねに変動し、そのかぎり、正義によってネットワークが制約されることもあれば、逆にネットワークの進展によって正義の方も変更されたり差し替えられたりせざるを得ないのであって、両者の関係はあくまでズレをはらんだ本質的緊張関係なのであって、そこにはハイデガーが見通そうとした究極的ホモイオーシスの関係など成立する可能性はない。それは繰り返すが、「正義」があくまで（生による生の）「代理者」だからなのである。

代理としての「正義」。それは完全な代理の原理的不可能性に裏打ちされている。一方にとっての「正義」は他方にとってはそれとして受け入れられない。そのとき正義は恣意的に暴力的に設定されざるを得ない。なぜなら、いかなる正義、すなわち、いかなる力の等価関係も設定されないことが、最大の不正義だからである。この設定に基づいて代理が執行される。しかし、設定が恣意的でしかないからには、設定はいつでも原理的に撤回可能だということでもある。それは、「力への意志」と「正義」、つまり「存在」と「真理」とは「軌」によってがんじがらめにきつく相互に締め付けられ、一致対応するのではなく、両者の関係はなにかしら余裕のある自由で隙間が存する関係だということ

とである。そうであるからこそ、「正義」がホモイオーシスであるばかりでなく、「非覆蔵性（アレーティア）」としての真理としても見定められるという、ハイデガーの「揺れ」（「ニーチェの形而上学」参照）に対しても一定の理解が可能となるだろう。ホモイオーシス（のオルトテース「正しさ」）としての「真理」がプラトンによって立ち上げられたのはあくまで、「アレーティア」というそれ以前からの「真理」を下地にしてのことであるかぎり、ホモイオーシスにはアレーティアが、どれほど歪な形においてであろうと、何らかの形で存続しているのでなければならないからである。そうである以上、ニーチェの「正義」もまた単にホモイオーシスとしての真理であるばかりでなく、ホモイオーシスの可能性を汲み尽くし、「別の開始」への「移行」を可能ならしめるためにも、アレーティアにもどこかしら参与する側面が認められるのでなくてはなるまい。さもなければ、ホモイオーシスの命脈が果てるとともに、単に、「最初の開始」のあらゆる命脈が果ててしまっ行って行き止まりとなるだけに終わり、ホモイオーシスならぬ「別の開始」への「移行」も考えられないことになってしまうからである。

「存在史」の観点からする、ハイデガーのニーチェ解釈とは、形而上学における、*Vorstellung*（「表象」）としての *Repräsentation* という理解を、ニーチェの *Repräsentant* にもそのまま適用するものである（*Sein = das Vorgestelltsein*）。そのことによって、「正義」は「力への意志」に内在した、「力への意志」の基準ないし尺度となる。それはすなわち、全体としての存在者のあり方との「一致」としての「真理」にほかならず、人間という「力への意志」による「大地の支配」に向けた、力の上昇・維持という絶対的基準を指示する。

他方——*Repräsentant* を「代理者」として理解すること。不可能な代理としての「正義」。それゆえ、「正義」自体も不可能。しかし、不可能を不可能として不可能のままに放擲することが最大の「不正義」。「正義」は「支配者」の「力」によって作為されねばならない。したがってまた、その都度の「正義」は偽物であらざるを得ず、基準としての「正義」は疑似基準にとどまる。——こうした「正義」理解は、初期から後期にいたる、ニーチェという個人的思想家全体に準拠し、そうした個人の「自己同一性」を解釈の枠組みとするものである。

いずれにせよ、ニーチェの思想であれ、他のいかなる思想であれ、その理解に当たっては、いかなる「解釈の枠組み」に依拠しているのかが、不断に問われなければならないのであり、ハイデガーのニーチェ解釈とはまさに、こうした「解釈の枠組み」の基底の問題性を突きつけているのである。

„Die kleinste Kluft ist am schwersten zu überbrücken.“ (*Zarathustra*)